

平成30年度

四万十市まちなか地域資源調査報告

高知工業高等専門学校

目次

1	調査の目的	1
	(1) 調査の目的	
	(2) 調査の経緯	
	(3) 調査の組織	
2	四万十市まちなかエリアの成り立ち	3
	(1) まちのみかた	
	(2) 地形	
	(3) 街区と町割り	
	(4) 土地利用	
	(5) 建築	
3	四万十市まちなかエリアの町並みの現状	13
	(1) 調査方法	
	(2) 調査結果	
	(3) まとめ	
4	景観構成要素の特徴	19
	(1) 調査方法	
	(2) 町家建築	
	(3) 産業建築	
	(4) 農家建築	
	(5) 邸宅建築	
5	地域内外における住民意識の把握	28
	(1) 地域資源発見ワークショップ	
	(2) 文学散歩—秋水と暁のふるさとを歩く—	
6	まとめ	35
	(1) 四万十まちなかエリアの景観的特徴	
	(2) 景観整備に向けた方向性	
	(3) 今後の展望	
	参考文献	36
	付録	37

1 調査の概要

(1) 調査の目的

本調査は、四万十市のまちなかエリア（以下、まちなかエリア）の再生を目指して景観の醸成や交通・賑わい創出について議論を行われた「四万十市まちなか再生検討会（平成29～30年度）」の一環として、まちなかエリアにおける地域資源の抽出と、歴史・文化的背景の整理を行い、今後のまちづくりおよび景観整備の方向を検討するための基礎資料とすることを目的として実施するものである。

調査は、下記の5点からなる。

- ① まちなかエリアの成り立ちを把握するための文献調査
- ② まちなかエリアの建造物の現況を把握するための悉皆調査
- ③ 景観構成要素となる建築物の詳細調査
- ④ まちなかエリアに対する地域内外の意識把握のためのワークショップ・アンケートの実施
- ⑤ まちなかエリアの魅力を伝えるリーフレットの制作

(2) 調査の経緯

本調査は、研究題目「四万十市まちなか地域資源調査」として、四万十市まちづくり課を委託元とする受託研究として高知工業高等専門学校が実施した。受託期間は、平成30年6月12日から平成31年3月29日である。現地調査は、6月23日、25日、30日、7月1日、8月23日、9月13日、17～19日の9日間で行なった。

調査では、図1-1の航空写真（1947年撮影）に示すようにまちなかエリアの東半分は、戦後に市街地化したエリアであることから、歴史・文化的背景を整理する本調査の目的に基づき、戦前までに市街地していたエリアを調査対象範囲とした。調査対象範囲は図1-2に示すエリアである。

調査対象範囲について、一次調査として建築物の外観および用途に関する悉皆調査を行った。次に、一次調査の結果を元に景観構成要素となる対象を抽出し、二次調査として実測・ヒアリング調査を行なった。



図1-1 1947年の航空写真（国土地理院）



図1-2 調査対象範囲

(3) 調査の組織

調査は、高知工業高等専門学校ソーシャルデザイン工学科助教・北山めぐみを主任調査員として、同校教員、ならびに同校学生および高知県ヘリテージマネージャー・公益社団法人 高知県建築士会の調査協力を得て実施した。調査参加者は以下の通りである。

調査参加者

西岡建雄（高知工業高等専門学校 ソーシャルデザイン工学科嘱託教授）

三橋修（高知工業高等専門学校 ソーシャルデザイン工学科准教授）

高橋七星、半田麗、野村凜太郎、山崎萌果、金山将、田原晃華（高知工業高等専門学校 環境都市デザイン工学科）

中野新、中野築（高知工業高等専門学校 まちづくり・防災コース）

黒井博美、山本効、入江恵子（高知県ヘリテージマネージャー）

今西伴仁（公益社団法人 高知県建築士会）

データ・図面作成補助

高橋七星、半田麗、山崎萌果、會田龍司、岡林舞、吉岡海音（高知工業高等専門学校 環境都市デザイン工学科）

中野新、中野築（高知工業高等専門学校 まちづくり・防災コース）

報告書執筆

北山めぐみ

2 四万十市まちなかエリアの成り立ち

(1) まちのみかた

本章では、まちなかエリアの成り立ちを整理する上で、四万十市におけるまちなかエリアとしての特徴を見出すため、「地形・町割り・土地利用・建物」の4つの視点に着目して整理することとした。

地形：集落や都市は周辺環境を考慮して作られるものであり、また、周辺環境によって性格づけられることから、地形的特性に着目する。

町割り：集落や都市を形成する過程において、宅地や農地、敷地同士をつなぐ道が配されることにより街区が形成され、生活生業を営む上で欠かせない水路が配される。いわば、集落・都市の骨格と言える。町割りには、地形や周辺環境などの自然的要因と、都市の性格や生業などの社会的要因とが影響すると考えられる。公共的なインフラであるため変化は生じにくい、社会状況や都市計画等によって上書きされていく。

土地利用：商業地や住宅地など、利用目的を使い分けることで生活やまつりごとが円滑にできるように工夫されてきた。土地利用は、地形や町割り、社会状況によって規定されると考えられ、社会状況の変化によって移り変わるものと言える。

建物：建物は、商業用途、居住用途など、使い方によって間取りや外観といった形態が変わることから、土地利用の特性があらわれると考えられる。自然災害や居住者の意識によっても変化していくものと言える。

これら4つの視点は、図2-1のように重層する関係にあると言える。また、都市や集落は時代によって変化していくものであるが、その中においても変わらないものがあり、そうした不変のものが地域の固有性であり、地域資源の軸として捉えられると考える。

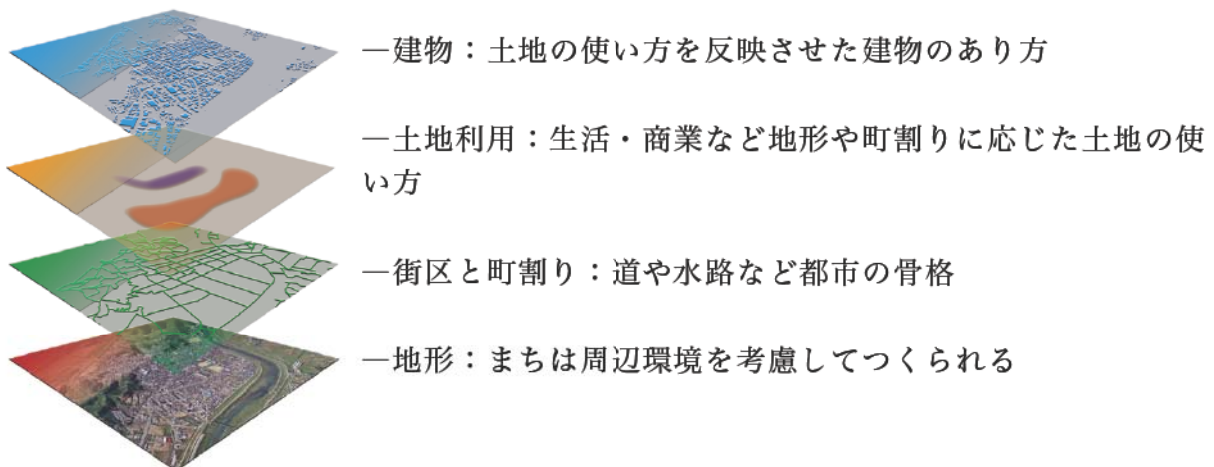


図2-1 まちのみかた

(2) 地形

四万十川・後川・中筋川によって形成された中州に大きな平地ができたことで、人々が集住できる平野となっている（図2-2）。舟運を主体として河川が物流の基軸として機能した時代には、流域が経済圏を形成して都市的な発展の下地となってきた。

また、まちの東・北・西の3方を山に囲まれ、東西を川によって挟まれた自然環境は、桂川と鴨川に挟まれた京都の地形に見立てられることもある¹。



図2-2 地形

¹ 文献1において、土佐中村は、都の公卿が領主として君臨したことに加え、自然環境が京都と似ていること、京都にちなんだ地名がつけられていることなどが述べられている。

(2) 街区と町割り

戦前までのまちなかは図2-3に示すように、川の氾濫を避けるように平地の西半分形成されていた。それでも度々水害にさらされていたことから（表2-1）、昭和4年から後川堤防工事に着手し昭和23年に完成した。これにより昭和22（1947）年から行われた中村都市計画事業²によって東側の宅地化が行われ（図2-4）、さらに昭和45（1970）年の中村駅の開通によりまちなかエリアの南側が発達し、現在の形となった（図2-5）。



図2-3 昭和22（1947）年の航空写真（国土地理院）

発生年	内容	発生年	内容
1659年 (高治二年)	岩崎堤防が決潰 人家のほとんどが流失	1899年 (明治三十二年)	町内の家屋は高所を残して、 その他は浸水した
1666年 (寛文六年)	下町の堤防が決壊 町は河原のようになった	1907年 (明治四十年)	京町、中の丁などが 床下浸水した
1721年 (享保六年)	町内は約1.8m浸水した	1911年(明治四十四年)	全町浸水した
1763年 (寶歴十二年)	大規模洪水が発生した。	1912年 (大正元年)	豪雨が続き、 全町が浸水した
1822年 (文政五年)	大風雨、山潮、享保六、七 年以來の洪水であった	1915年 (大正三年)	後川橋が流失 失死者、重傷者も出た
1846年 (弥化三年)	大風雨が起こった	1918年 (大正七年)	浸水家屋は500戸に及んだ
1849年 (嘉永二年)	大雨が四日間降り続き、 町は浸水した	1920年(大正九年)	家屋の流失・全潰の被害 橋梁が流失した
1870年 (明治三年)	風雨が起こり、 町内は浸水した	1928年(昭和三年)	暴風雨により、 町内は浸水した
1886年 (明治十九年)	家屋倒壊、流失、 大破などの被害	1935年(昭和十年)	大洪水に見舞われ、 全町浸水した

表2-1. 中村の洪水の歴史（文献2を元に作成）

² 文献2、p67



図2-4 昭和50（1975）年の航空写真（国土地理院）



図2-5 昭和60（1985）年の航空写真（国土地理院）

街路の構成を見ると、後川・四万十川とまちの中心とをつなぐように南北に走る街路が通り、たてまちと呼ばれる。たてまちをつなぐ東西の通りはよこまちと呼ばれ、グリッド状の町割りが形成されている。近代以降にできた街路もあるものの、こうしたグリッド状の構成は一条公時代にはすでに形成されていたことが古地図（図2-6、図2-7）から読み取れる。また、筆者らの現地調査により、これらの街区の中心には石積みによる水路が確認された（図2-8）。背割り水路は近世に整備が行われることが多いことから³、まちなかエリアに見られる背割り水路の築造は近世に遡る可能性が考えられる。



図2-6 一条公時代の地図（出典：文献4）

³ 文献3

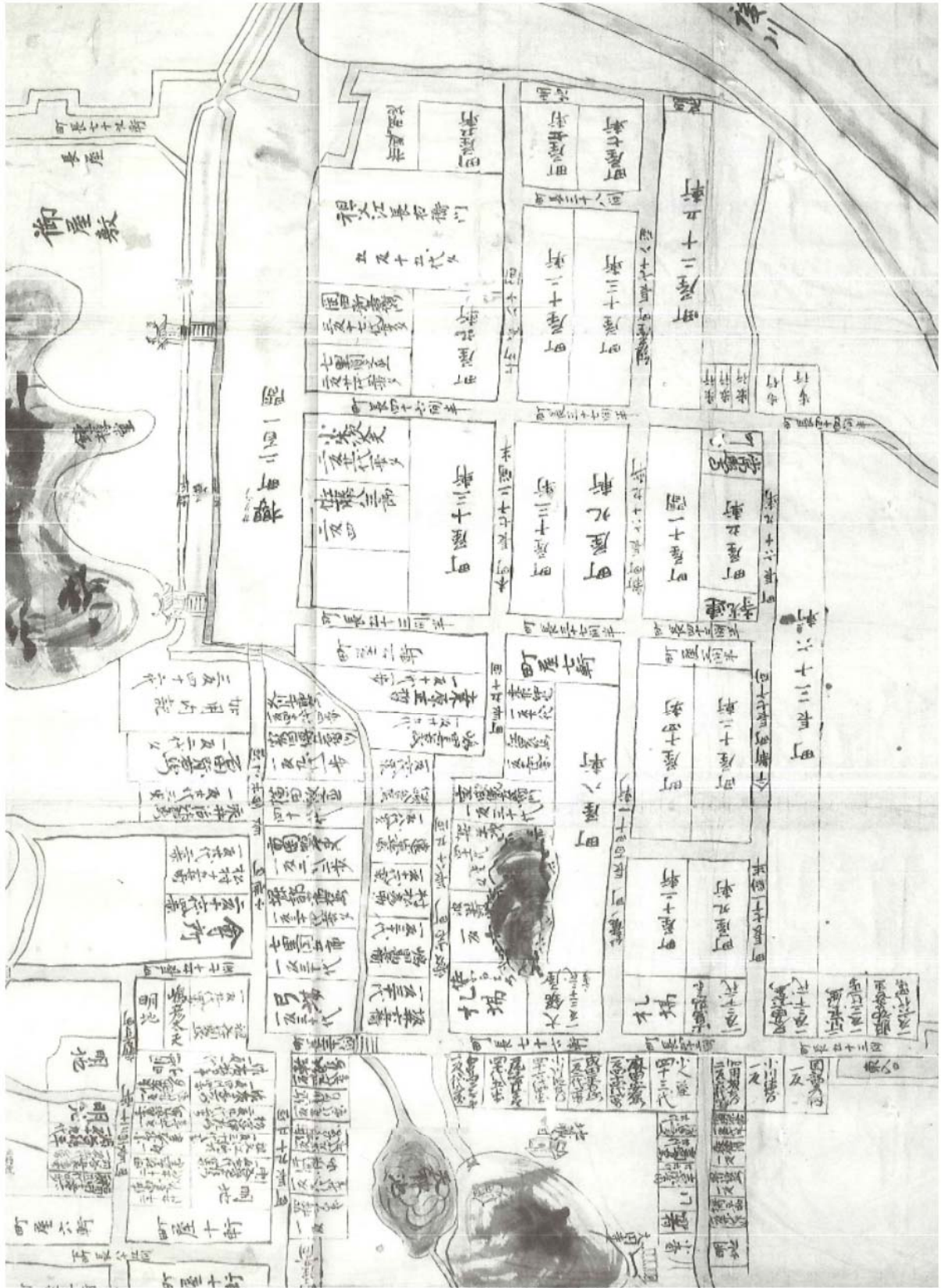


図2-7 三万石時代の地図 (出典：文献4)

昭和期に入ると都市計画事業により旧市街地の区画整理が行われるとともに、昭和35年には町名変更が行われた⁴。現在の町割りと、変更前の町割りをそれぞれ図2-9、2-10に示す。現在の町割り（図2-9）を見ると、本町・京町・新町・天神橋等の境は街区の中心に町の境界線が敷かれ、街路の東西もしくは南北が向かい合った両側町を構成しているのに対し、小姓町や桜町では街路を中心に町の境界線が敷かれた片側町を構成している。次に、変更前の町割りをみると（図2-10）、本町・京町・新町は、東西方向・南北方向の2方向に対して両側町を構成しており、一方、天神橋は以前には片側町であったことがわかる。さらに旧の町割りにおける片側町と両側町の分布を見てみると、近世の町人地であったエリアは両側町、屋敷地であったエリアは片側町であることがわかる。

町人地ではみせを構えることから街路を介した日常的な交流が発生することから両側町が発生しやすいために、こうした町割りの違いが見られると考えられる。現在の町割りは、旧の町割りを引き継ぎながら、現在の土地利用に合わせて両側町・片側町の構成を継承していると言える。

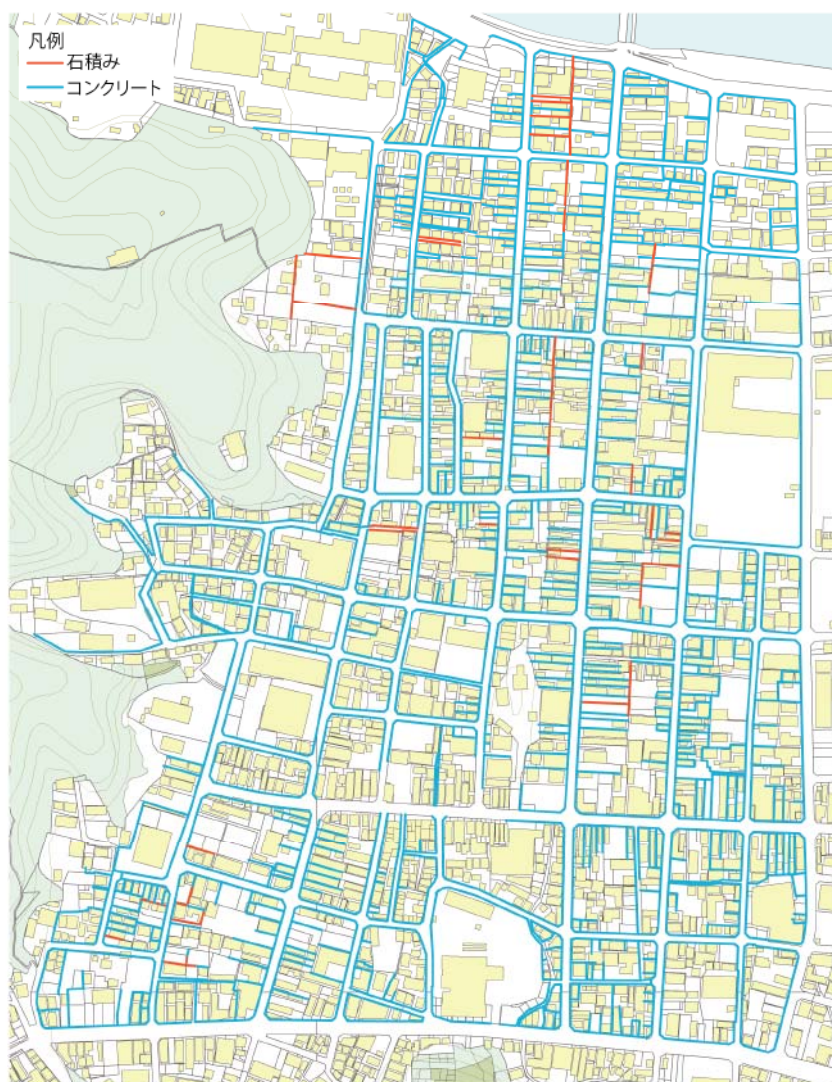


図2-8 水路分布図

⁴旧町名や街路の由来については文献2pp.106-144を参照されたい。

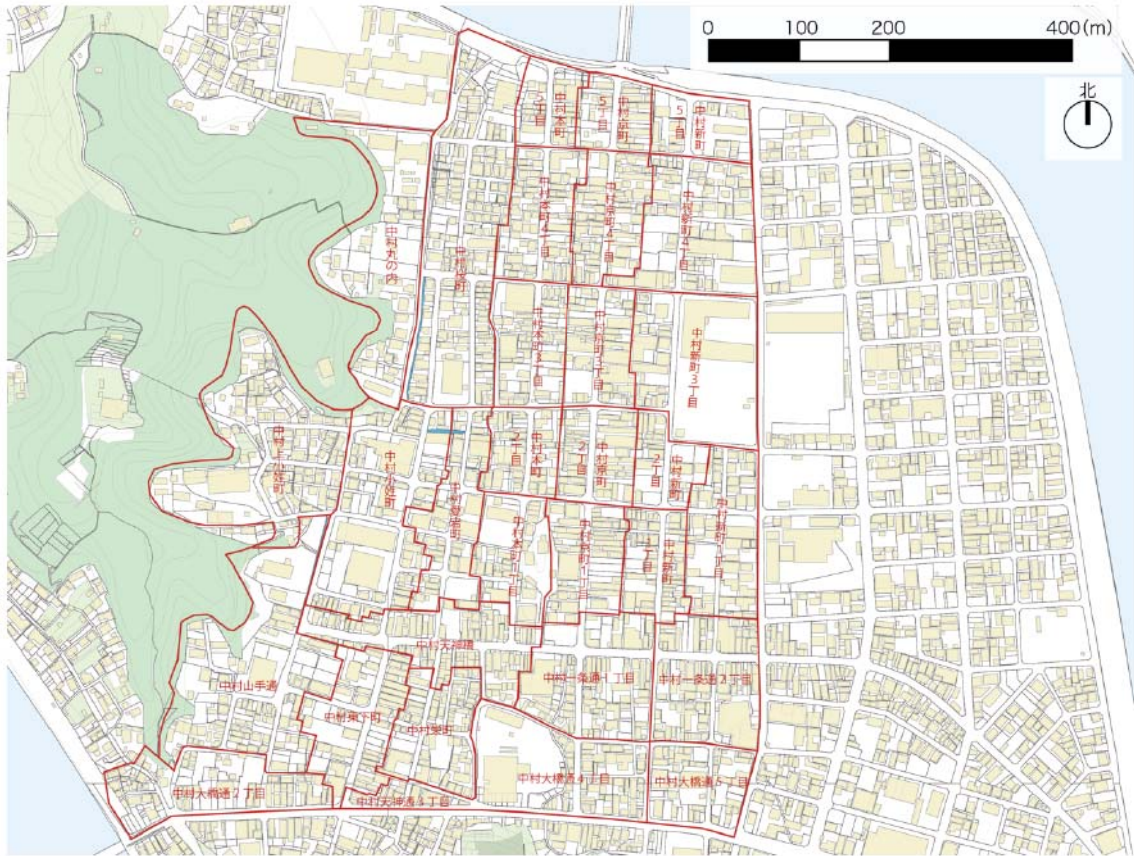


図2-9 平成30（2018）年時の町割り

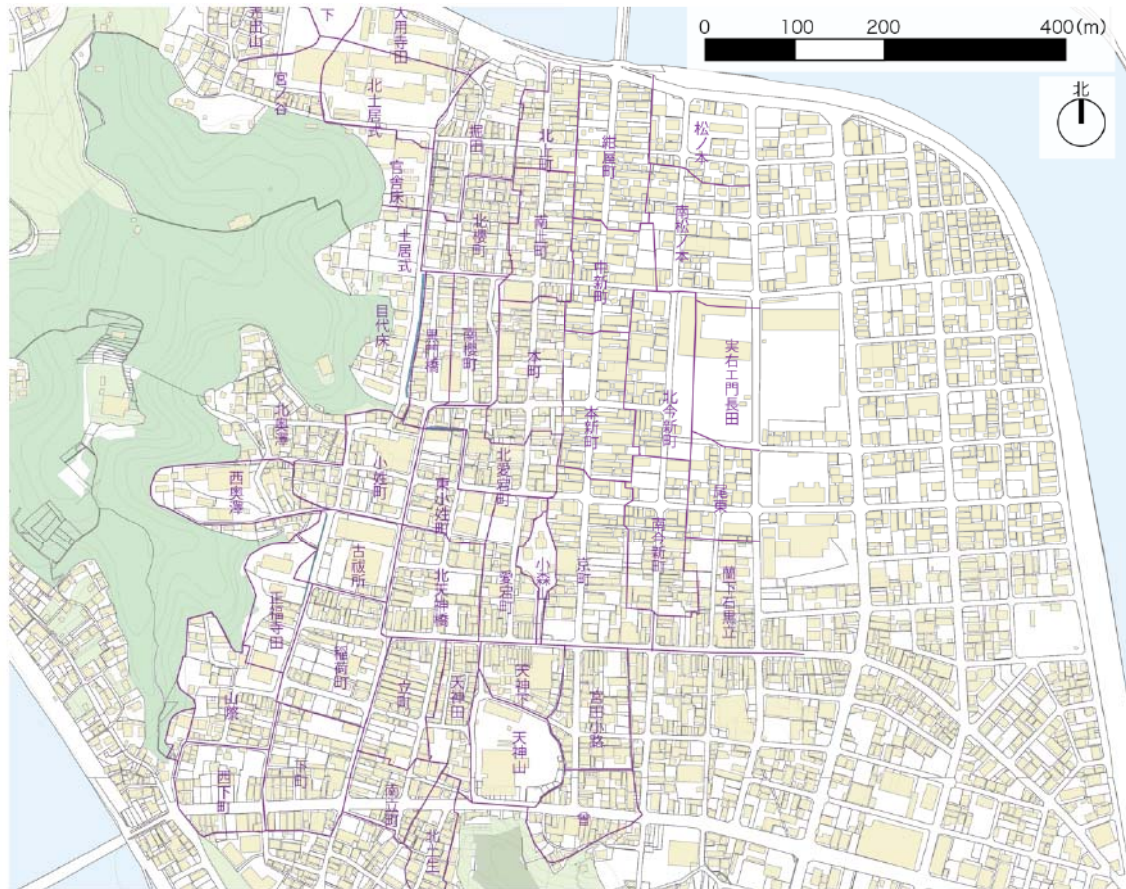


図2-10 昭和30年（1955）頃までの町割り（昭和20年代都市計画図を元に作成）

(3) 土地の使い方

文献資料をもとに室町時代後期(図2-11)、江戸時代初期(図2-12)、明治45年(図2-13)、昭和20年代(図2-14)の土地利用を現在の地籍図に重ね合わせ復元を試みた。

室町時代後期(一条公時代)には一条家の御殿(現・一条神社周辺)の周囲に武家や屋敷が配され、現在の小姓町には奉行所が置かれていたことが図示されている。

江戸時代初期(三万石時代)には一条家の屋敷は御廟所となり、城の麓に武家地や社寺が分布し、その周囲に町人地が広がる城下町的な都市配置が形成された。また、古地図の描写から、屋敷地は方形に近く、町家や短冊形の敷地であったことが読み取れる。

明治45年の土地利用を見ると、屋敷地であったエリアは細分化され、新たな道路も敷かれている。小さな敷地に分割されている。宅地の細分化の要因についてはさらなる分析が必要ではあるが、中村支藩の改易に伴う武家屋敷の解体が影響していると推察できる。

昭和20年代には、細分化されたエリアにおいて再び合筆が進みつつある様子が見て取れる。各時代の考察から、京町界隈は、江戸期に形成された町人地の町割りを現在に引き継いでおり、や敷地であった小姓町周辺は、明治期に細分化され変化を生じたものの、再び時代を経て敷地規模が戻りつつあり、土地の履歴を継承していると捉えることができる。



図2-11 室町時代後期の土地利用
(文献4の古地図をもとに作成)



図2-12 江戸時代初期の土地利用
(文献4の古地図をもとに作成)

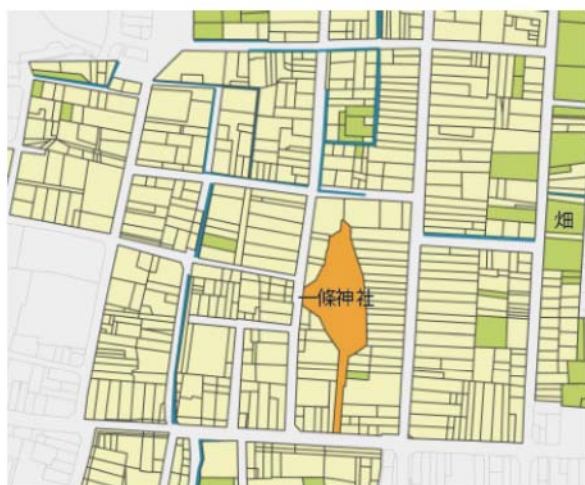


図2-13 明治45年頃の土地利用・地割
(明治45年の切り図を元に作成)

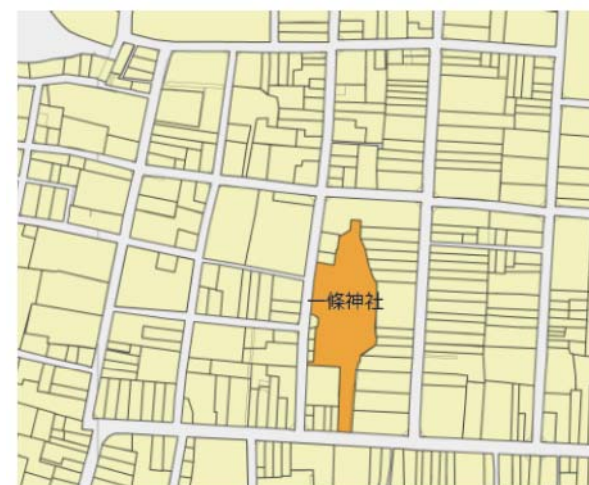


図2-14 昭和20年代の土地利用・地割
(昭和20年代都市計画図をもとに作成)

現在も為松公園の麓には敷地規模の大きく、その周囲に短冊形の商業的な土地利用が見られる。また、土地利用に対応するように町割りがなされ、武家地は片側町、商業地は両側町を形成し、紺屋町や稲荷町など土地利用に応じた町名がつけられていた。

東山や一條神社、不破八幡宮など、一條氏から派生する地名や社寺、遺構は、地域住民による場所の意味づけや祭礼によって伝承されてきたと言える。

(4) 建築

一条通・京町・本町等は現在も商店街となっており、店舗専用もしくは店舗併用住宅が多く見られる(図2-15)。一方、丸ノ内周辺には専用住宅が多く、為松公園の麓には社寺および官公庁施設が集中して分布している。これらの配置を見ると、為松公園は中世から近世にかけて使用された城郭であったことから、その麓に社寺・武家屋敷が配され、周囲に町人地が広がると近世的都市配置が現在に引き継がれていると考えることができる。

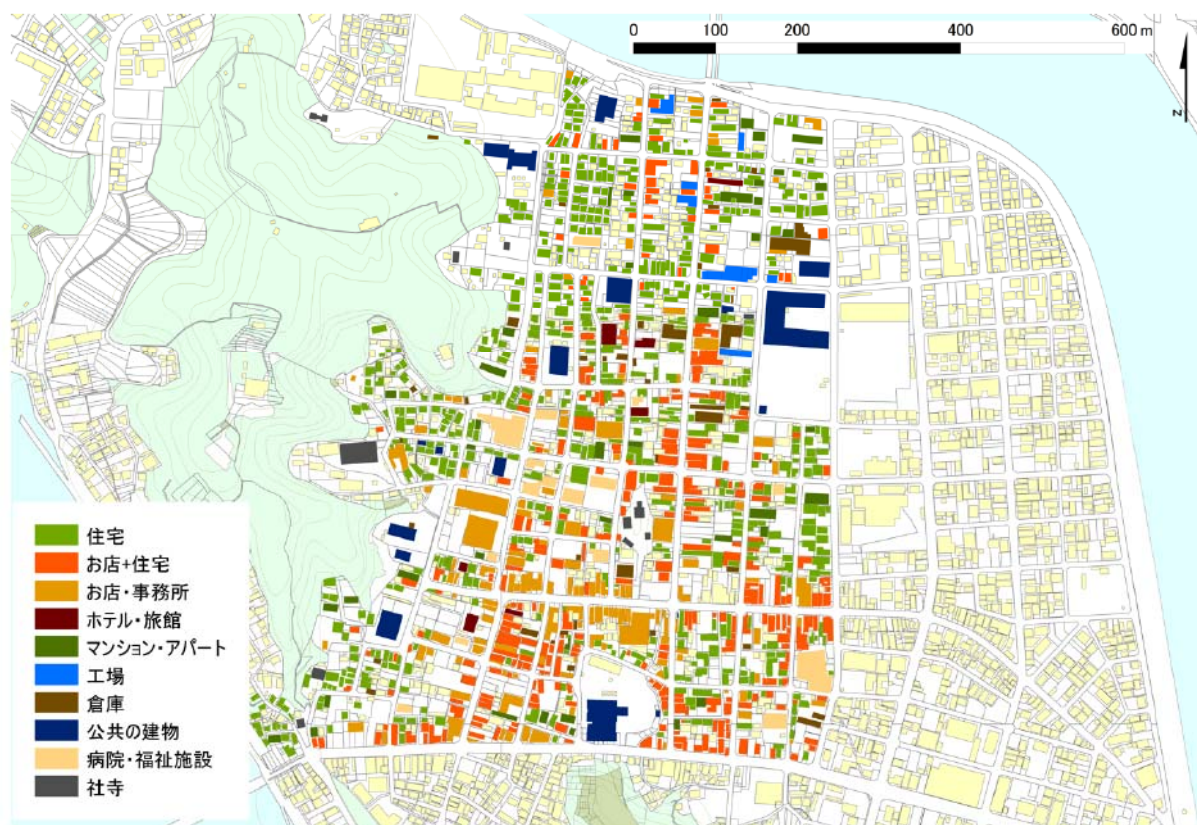


図2-15 建築物の用途

3 四万十市まちなかエリアの町並みの現状

(1) 調査方法

まちなかエリアを構成する町並みの現況を捉えるため、建築物の外観・用途等についての悉皆調査を行なった。図3-1に示す調査シートおよび住宅地図を用いて、現地にて目視によって記入し、ArcGISを用いてデータ化を行なった。

ブロックNo.	地番	建物No.	工作物No.	景観No.	建物名(表札・看板名などあれば記入)
N1-1	47				
<p>①調査事項</p> <p>A 建物・工作物・景観の区分 ※いづれか1つに○</p> <p>①建築物 A 本或裏面の建物(当初の形状を良好に保つるもの) 町家・長屋・旅館・和風住宅・蔵・工場・洋風建築・社寺・その他()・不明</p> <p>②工作物 B イアの構物を一部改造したもの 町家・長屋・旅館・和風住宅・蔵・工場・洋風建築・社寺・その他()・不明</p> <p>C 大規模の建物 D 生垣・石垣・塼・土塼・塼瓦・コンクリートブロック・パースブロック・その他()・不明</p> <p>③景観 E 道・橋脚・線・水・その他()</p>					
④建築物・②工作物のみ記入					
B 年代					
<p>⑤建築物のみ記入</p> <p>C 用途 F 用途 G 利用状況 H 階高 I 構造 J 配設 K 屋根 L 敷地に対する建屋形式 M 外壁・器具 N 特徴的要素 O 木道を有している場合のみ該当するもの記入 P 本建屋の表具</p>					
<p>M 建築物・工作物・景観の特徴 ※外観的特徴や「いわれ」などがあれば記入</p> <p>敷地内にホコラ有り(写真)</p>					
調査者氏名					



図3-1 調査に用いたシート・地図

(2) 調査結果

【建築年代】 中村の旧市街地を構成する建築物は、昭和40年代に建築されたものが最も多く、昭和20年代、それ以前のものが数件見られる(図3-2、3-3)。大正もしくは昭和初期に遡るものには、旅館建築や塗籠造りの商家建築が含まれる。また平成以降のものも200軒以上見られることから、緩やかな建築更新が進んでいると言える。

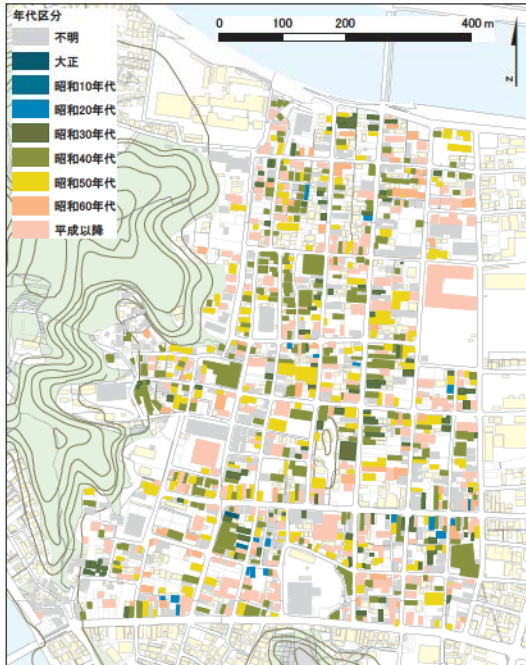


図3-2 建築年代ごとの分布図

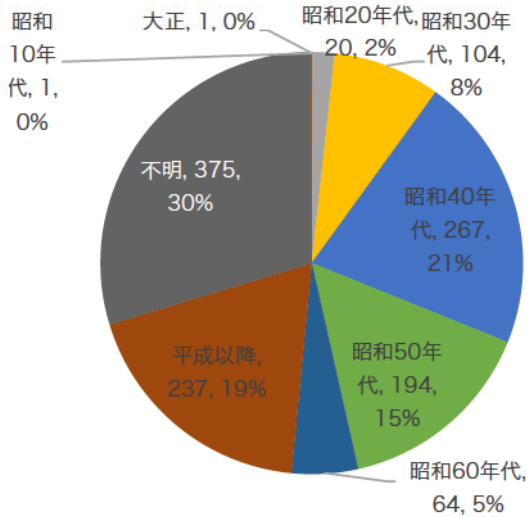


図3-3 建築年代の割合

【建築規模】 階高は2階建て以下のものが8割を占め、平屋・つし2階も一定程度見られることから(図3-3、3-4)、比較的低層の町並みが維持されていると言える。

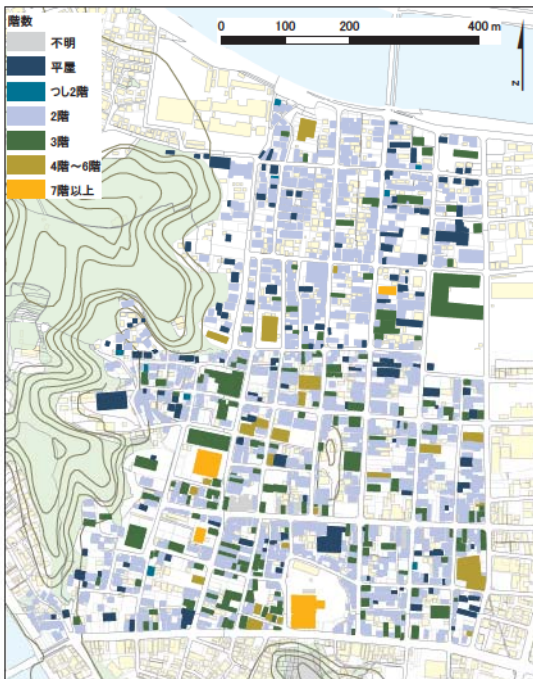


図3-3 階高の分布図

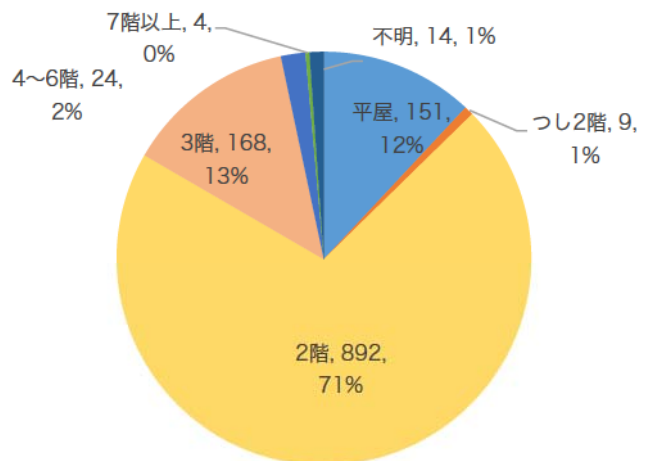


図3-4 階高の割合

【屋根形式と屋根材】 屋根形式は切妻屋根が最も多く約6割を占め、そのほかに陸屋根、片流れ、寄棟などが見られる（図3-5、3-6）。

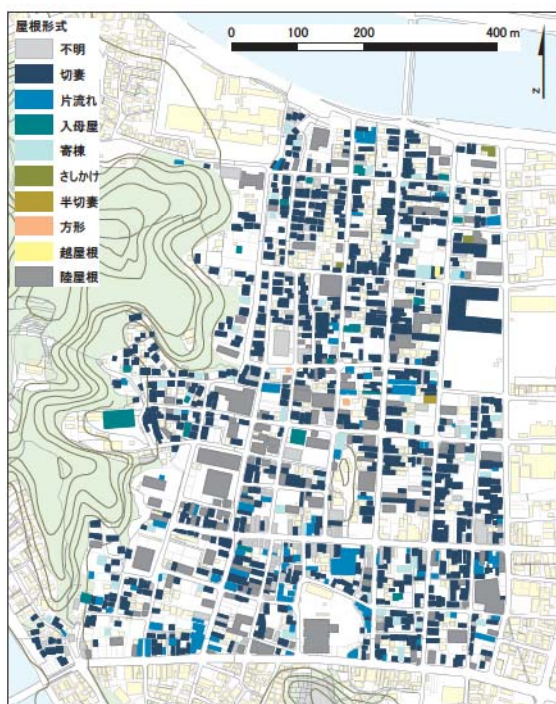


図3-5 屋根形式の分布図

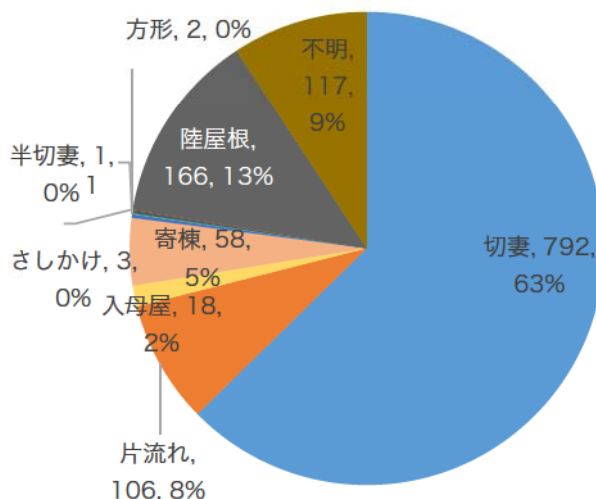


図3-6 屋根形式の割合

次に、屋根材については、棧瓦葺きが約4割見られ、トタン、セメント瓦などの採用が多く見られた（図3-7、3-8）。また、1軒のみであるが、「安並」と書かれた中村で焼かれた瓦も確認することができた（図3-9）。

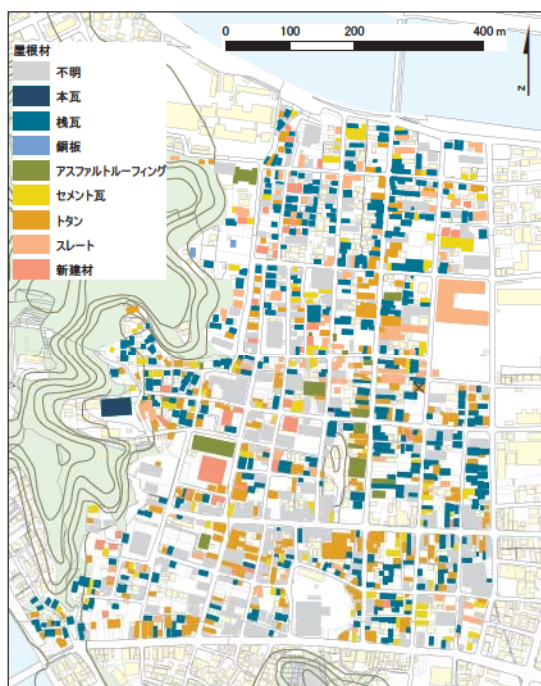


図3-7 屋根材の分布図

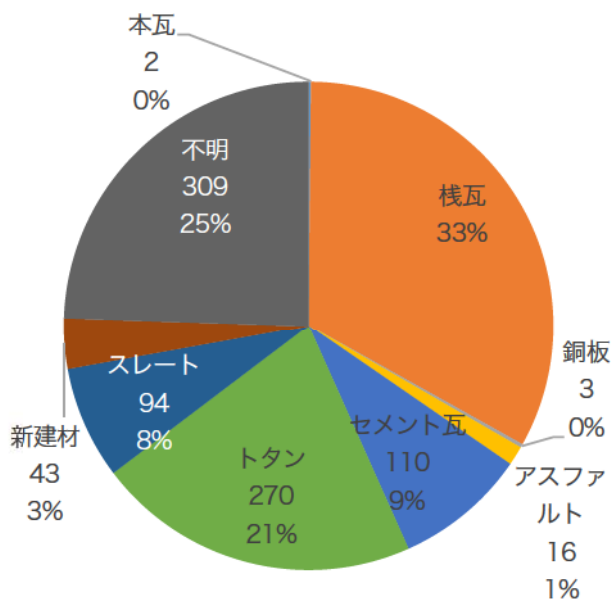


図3-8 屋根材の割合



図3-9 安並の刻印がされた瓦

【接道状況と表構え】 接道状況と表構えを見ると（図3-10）、道路に接して建築するのは京町・本町沿いに多く、妻入りを主としながら平入りが混在している（図3-11）。管見では昭和初期建造のものでは平入り、昭和中期以降になると妻入りとする傾向が見られる。一方、為松公園の麓には、主屋を後退させ道沿いに塀や生垣を設ける邸宅型の住宅が多く見られる（図3-12）。

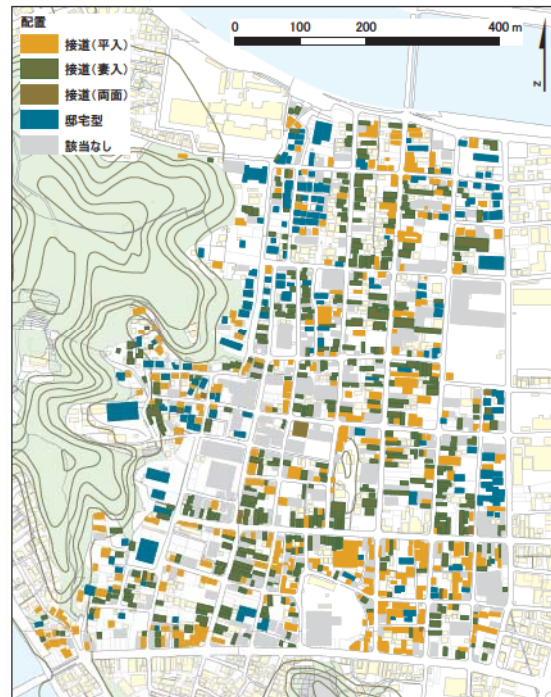


図3-10 接道状況と表構え



図3-11 接道型の町並み



図3-12 邸宅型の住宅

【特徴的な要素】 調査対象区域内には、切妻屋根の建物の街路側に看板状の壁を立ち上げた「看板建築」が京町・本町・一条通りに多く見られる（図3-13、3-14）。商店街として活況を見せた昭和中期頃の店舗建築として採用されたと考えられる。

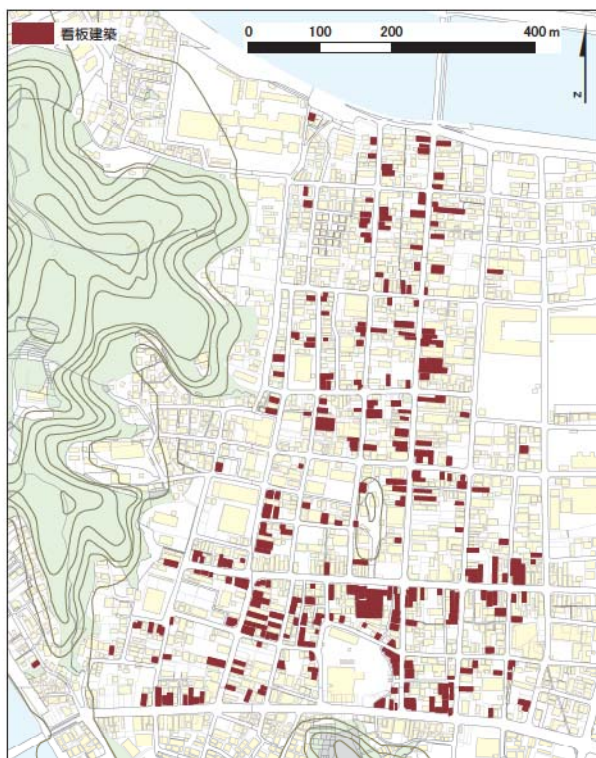


図3-13 看板建築の分布



図3-14 看板建築の事例

そのほかに、外壁材として100～150mm程度の細い板材を用いたものも多く見られる（図3-14、3-15）。これは、四万十川を經由して木材を産出していたことから木材が手に入れやすかったことや、洪水等により破損した際に直しやすいことなどがあると考えられる。

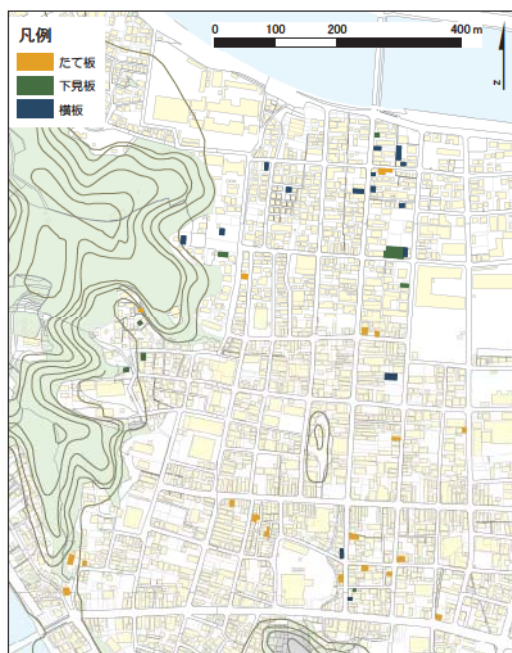


図3-14 板張り意匠の分布



図3-15 板壁のバリエーション

また、2階開口部に「欄干」を設けたものも多く見られる（図3-16、3-17）。旅館や料亭が多くあったことから、2階の客室等から町並みや祭りの様子を見下ろす場として設えられたと考えられる。



図3-16 欄干を持つ建物の分布



図3-17 2階に設置された欄干

(3) まとめ

調査対象エリアは、2階建以下の低層の建築物を主として構成された町並みと言える。昭和40年代の建築物を中心とした昭和・平成の町並みであるが、大正・昭和初期のまちの様子を伝える建築物も確認できた。旧町人地では商業建築を主とした接道型の店舗建築が見られ、看板建築や欄干が見られた。旧武家地には邸宅型の住宅が分布し、城下町的配置に基づく土地利用が現在の町並みの様子の中に見ることができることが明らかとなった。また、瓦、多様な板張り意匠のバリエーション、開口部意匠を確認することができた。

今後の景観整備として、土地利用を踏まえたゾーニング、四万十川流域の交易を示す素材を用いたデザインコードを設定することで、江戸期以降の中村の特性を有した町並みの維持、向上を図っていくことができると考える。また、まちの歴史を地域内外の人々に伝えることができるよう、昭和初期ごろまでに建てられた建築物を保全・活用していくことが望まれる。

4 景観構成要素の特徴

(1) 調査方法

一次調査の結果を受け、建築種別の類型化を行い、二次調査として6件を抽出し実測・ヒアリング調査を行なった。建築種別および調査対象は表4-1の通りである。

表4-1 建築種別とその特徴

建築タイプ	類型の特徴	建物名
町家建築	接道して建築され、街路側に開口部を広く持つ。道側を店舗、奥を住居として利用することが多い。	・笹岡旅館 ・貞弘家 ・東家
産業建築	製造・加工などを行うための工場機能を持つため、住宅に比べて規模の大きな空間を有する。	・マルバン醤油 ・朝日屋クリーニング
農家建築	主屋の周囲に空地があり、農作業を行うため敷地に余裕のある配置を取る。敷地内には納屋などの付属屋が配置される。	・柿内家
邸宅建築	道から交代して主屋を建て、街路沿いを生垣や塀で構成する。居住専用として建てられる。	建築年代が比較的新しく、類型上の傾向が現れにくいため、今回は調査対象外とした。

(2) 町家建築

旧町人地であったエリアには、主屋を道に面して建てる町家型の建築物が多く見られ、商業の町としての様子を現在に伝えている。外観形状によって、平入り・妻入り・看板建築に大別できる。また、街区の角地は昭和20年代の都市計画事業により隅切りがなされたことから、角地に三角の空地（道路）を持つものが多いことも特徴と言える。そこで本調査では、入母屋妻入り形式の旅館建築、平入り町家、看板建築、角地の建築の4件について実測調査を行った。

【笹岡旅館（旅館建築）】

東下町に位置し、木造2階建真壁造り、入母屋形式の旅館建築である。現在の経営者は家系としては3代目であるが、1代目がすでに旅館として使われている本物件を買い取って経営をしていたといい、ヒアリングによれば築80年以上である。間口幅7.4m（4間）、奥行き幅20.7mの短冊形の敷地に建つ。2階に木製の欄干を有しており、屋根は瓦葺きからスレート葺に変更している。1階には玄関、居住スペース、水廻りがあり、2階を客室および納戸として利用している。階段は、入り口と中央の2箇所あり表導線と裏導線で使い分けている。玄関・浴室の土間には四万十川の石を用いている。室内は、部屋の間仕切りを建具から壁に変更した痕跡が多く見られるが、長押を用いた部屋は東寄りの1室のみであり、簡素なしつらえと言える。また、東寄りの座敷は南側を明け、窓際に欄干を備

え、通風・採光を確保している。宿泊客は、以前は卸売りなどの行商人が多く常連客も多かったという。現在はビジネス客やサーフィン・イベント等での利用者が多い。



図4-1 笹岡旅館外観



図4-2 四万十川の石を敷いた玄関土間

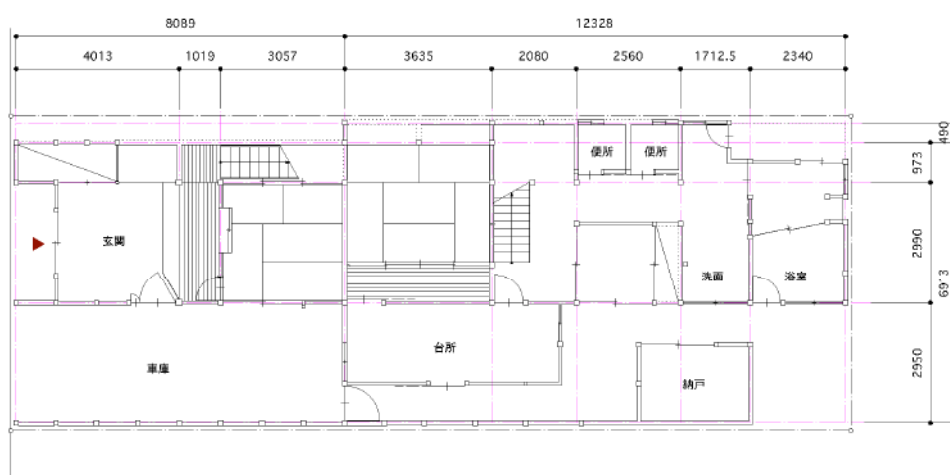
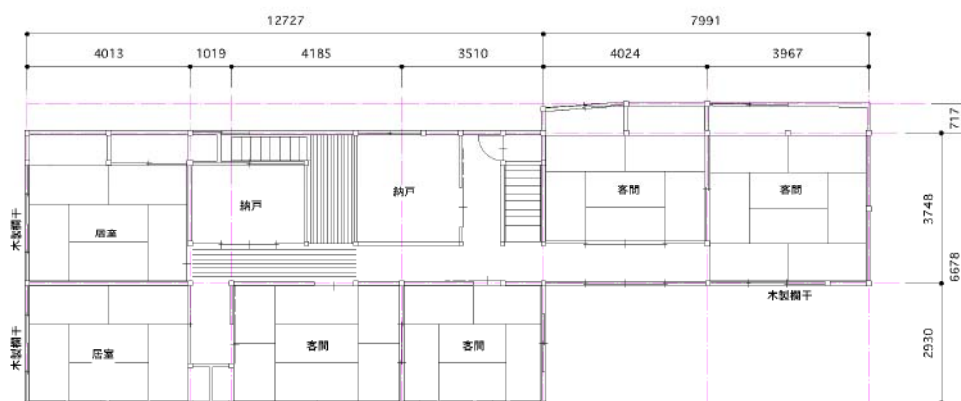


図4-3 笹岡旅館平面図（上：2階 下：1階）

【貞広家（平入り町家）】

調査対象区域内で、唯一漆喰塗籠造りの主屋として現存する建築物である。短冊形の敷地の道路側に主屋を配し、廊下で接続した便所、離れの釜屋、倉庫がたつ。主屋規模は間口幅11.5m（6間半）、奥行き5.6m(3間)で東西方向に下屋を有する。南側を通り土間とし、3畳間に分割されているが、従前は4つ間取りであったと考えられる。和小屋組とし、梁および地棟は直径200mm程度であり、屋根野地板に竹、杉皮を用いている。

現在の居住者の2代前は質屋を営んでいたといい、その後、1代前はドーナツの製造・卸をしていた。明確な建築年代は不明であるが、昭和の南海大地震では裏の釜屋は壊れたが母屋は壊れなかったという。



図4-4 貞広家外観



図4-5 野地に竹・杉皮を使った小屋裏

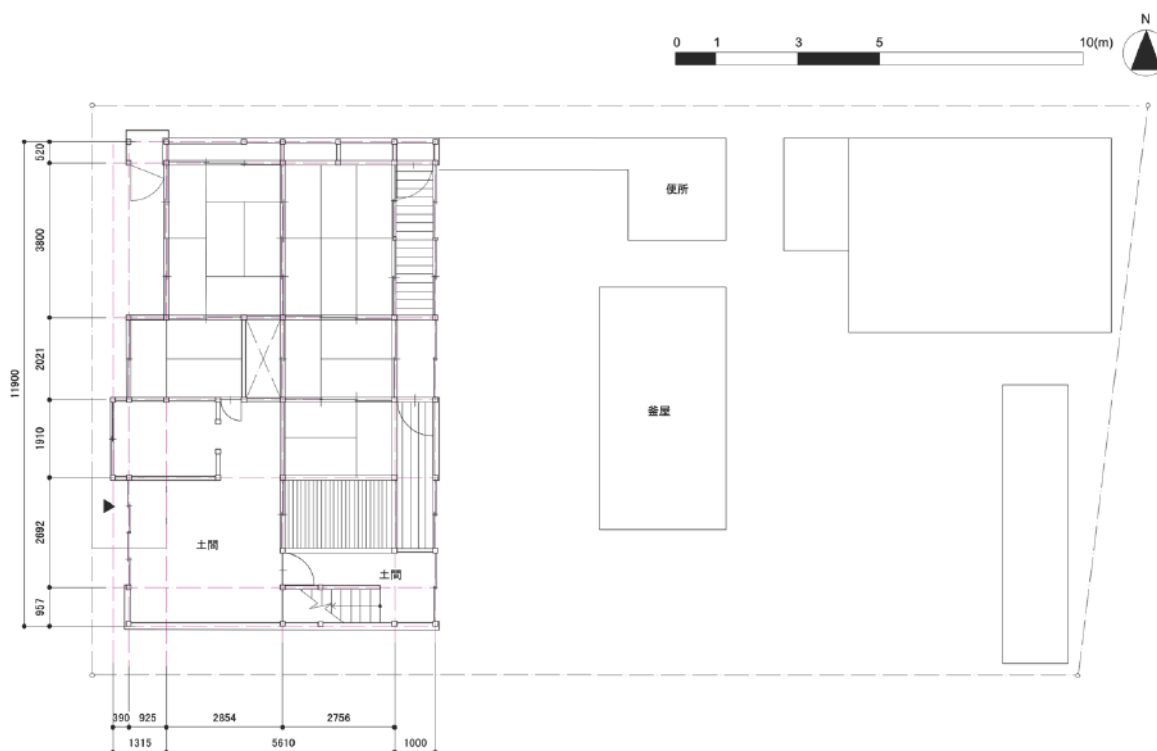


図4-6 貞広家配置図兼1階平面図

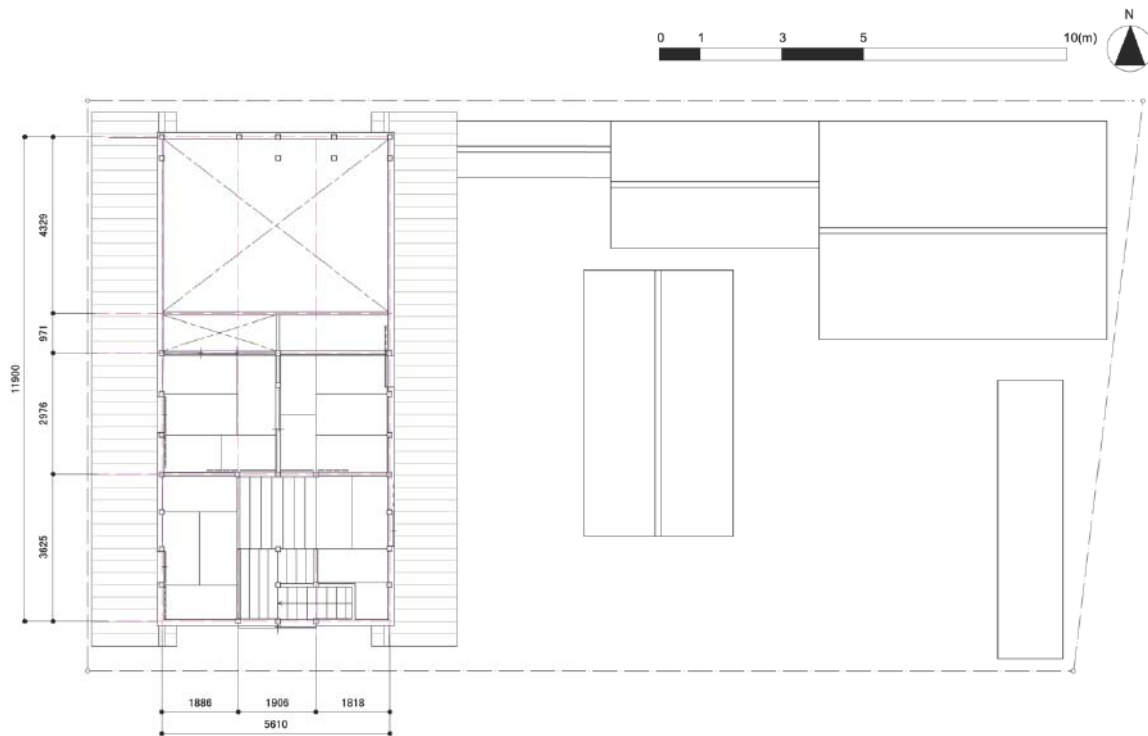


図4-7 貞広家2階平面図

【東家（角地の建築）】

昭和20年建造であり、昭和21年の南海大地震を乗り越えた建築物である。都市計画事業により隅切りがなされており、2階平面を見ると、そのまま6畳間が三角に切り取られている様子が見て取れる。小屋組は和小屋組であり、直径20cmほどの丸梁が用いられている。



図4-8 東家外観



図4-9 東家小屋裏

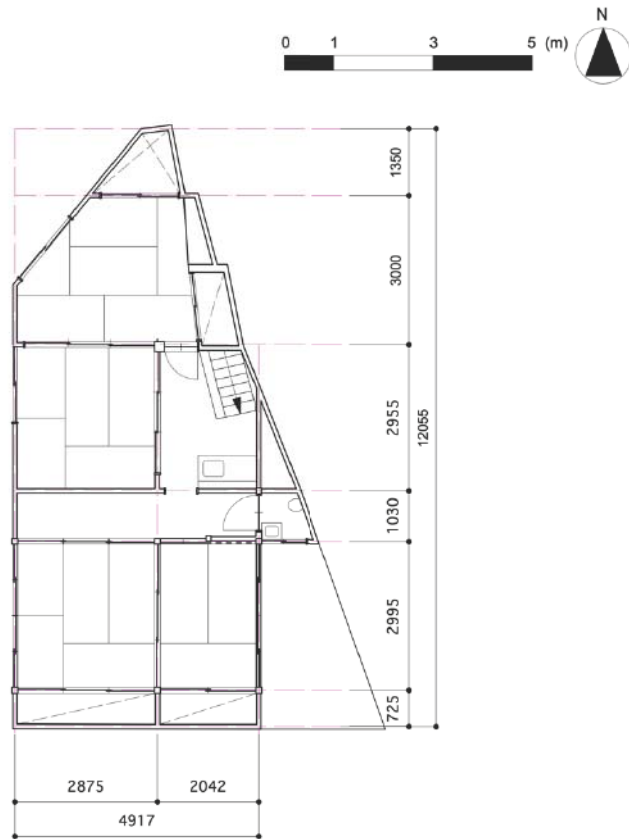


図4-10 東家2階平面図

(3) 産業建築

四万十川・後川の伏流水を使った酒・醤油などの醸造業を営む企業が見られる。これらの建築には、建築内部を作業場として用いるために、細い部材で広い空間を作ることのできるトラス構造が採用されている。トラスの部材は、外観にも表出しているため、外観意匠から、産業建築の構造を知ることができる。

【マルバン醤油】

醤油製造所は昭和戦前までは中村に7～8件あったが、現在は2社となっている。マルバン醤油は東西に細長く、京町・新町の2つの通りに面している。昭和3年の創業であり、新町側に木造の工場棟が連なり、京町側にRC造による店舗・事務所棟が建つ。敷地内の井戸から水をくみ上げ醤油製造に利用していることから、四万十川の伏流水を使った醤油としてPRを行なっている。図4-14断面図に示すように、トラス構造の間をつなぐように和小屋組の梁部分をラチス構造としている。既存の倉庫の間を室内化するために後から組まれたと考えられる。



図4-11 マルバン醤油外観



図4-12 木造トラス

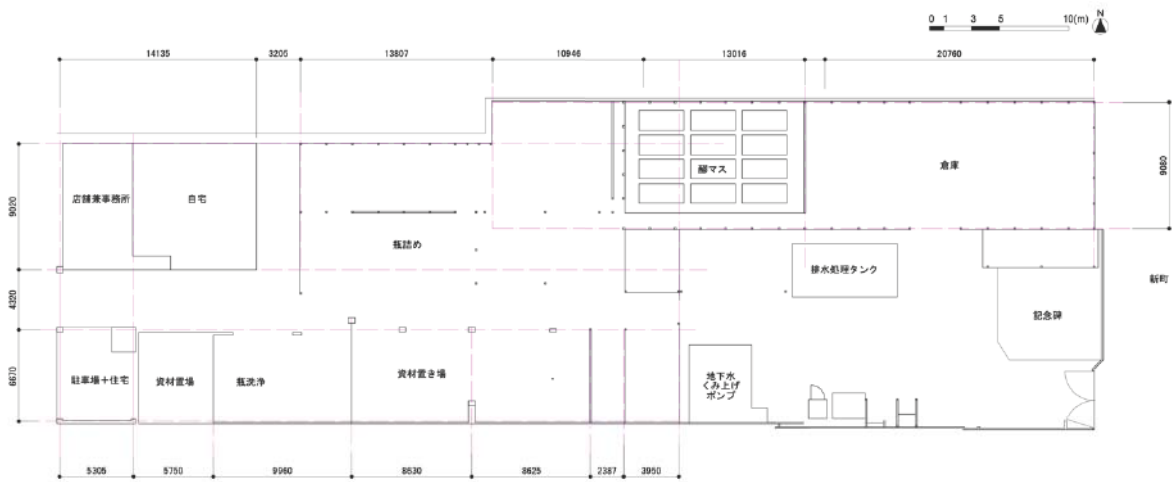


図4-13 マルバン醤油平面図

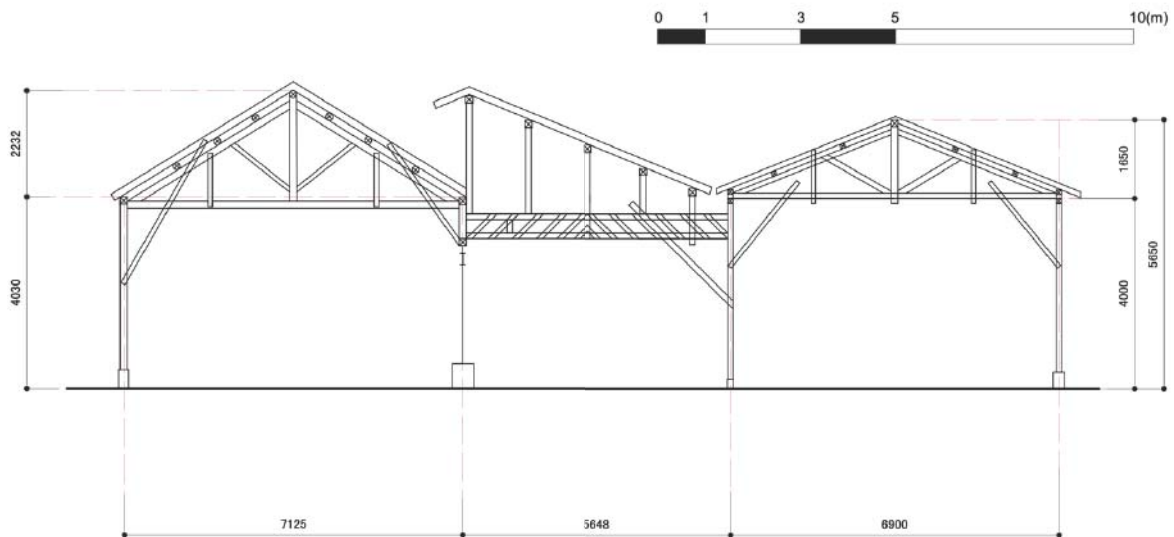


図4-14 マルバン醤油 断面図

【朝日屋クリーニング工場（看板・工場建築）】

鉄骨造2階建妻入りの建物の街路側を看板で覆った建築物である。クリーニング店として近年まで営業しており、内部は作業スペースを確保するため鉄骨トラスが用いられている。



図4-15 朝日屋クリーニング工場外観



図4-16 鉄骨トラス

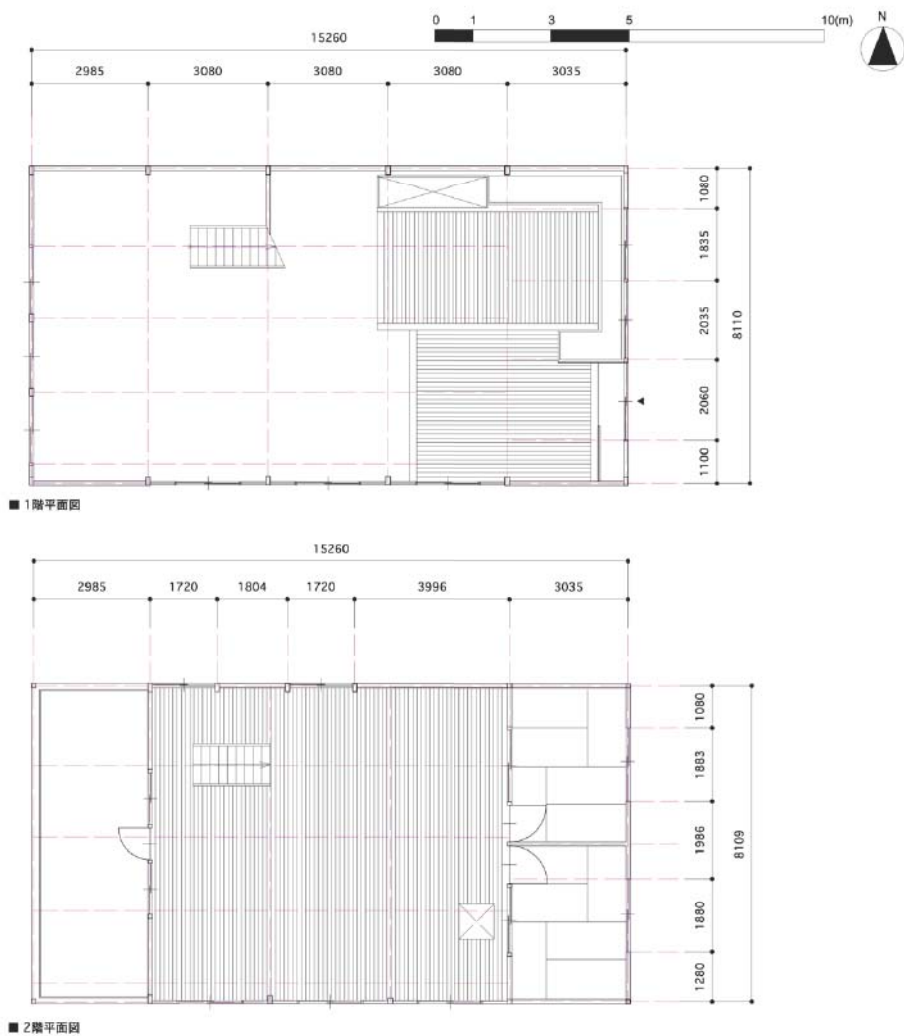


図4-17 朝日屋クリーニング工場平面図

(4) 農家建築

上小姓町には、敷地に余裕を持って建物を配置した農家型の民家が数件点在している。当該エリアでは、洪水の影響を受けにくい山の谷筋を利用して稲作を行っていた可能性が考えられる。

【柿内家】

当該主屋は昭和38年に蕨岡から移築し、間仕切りを設置して4軒長屋として利用された。その後、敷地内への増築に伴い北側の1軒を減築した。和小屋組とし、40cm近くある地棟を用いており、町家建築に比べて骨太の材料を用いている。また、主屋中央には190cm角の大黒柱が用いられている。また、平屋であるが一部を大引天井とし、屋根裏を物置として利用できるようにしている。



図4-18 柿内家外観

図4-19 和小屋組

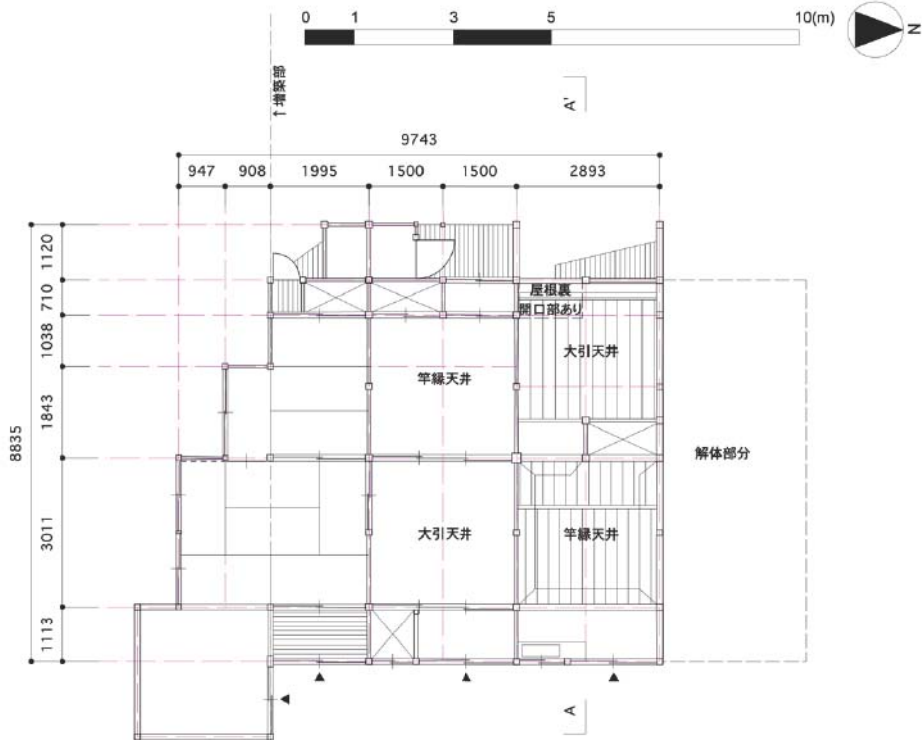


図4-20 柿内家平面図

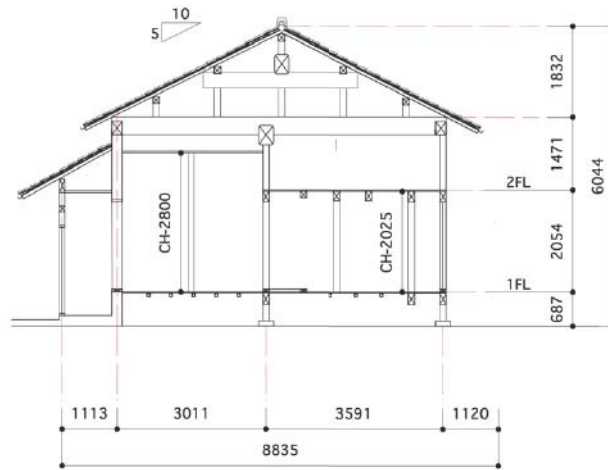


図4-21 柿内家A-A'断面図

(5) 邸宅建築

為松公園の麓には、建物と道との間に庭を設け、道沿いに塀や生垣を設けた邸宅型の建築が並んでいる。比較的建築年代が浅いものが多いことから今回は実測対象とはしなかったが、江戸期の土地利用を継承する建築類型として、重要な役割を持つ。



図4-22 安岡良亮邸跡



図4-23 木戸明邸跡

5 地域内外における住民意識の把握

地域住民や来訪者がまちなかエリアに対してどのような意識を持っているかを試行的に捉えるため、「地域資源発見ワークショップ（2018年10月8日）」、「文学散歩—秋水と暁のふるさとを歩く（2019年3月9日）」を開催した。

（1）地域資源発見ワークショップ

本調査の一環として、「おしえて！みんなの知っちゃおう中村のまち」と題して住民ワークショップ（以下、WS）を実施した（2018年10月8日）。WSでは、まちなか調査から見てきた特徴的な建物、水路、石積み、社などの構成要素の背景をヒアリングから明らかにするとともに、住民から見た中村の景観意識の把握、共有することを目的とした。表5-1にワークショップのプログラムを示す。話題のきっかけになるように、質問カード(図5-1)を作成し、質問カードと合わせて古写真(図5-2)を各テーブルに配置した。WSの参加者は、地域の歴史に詳しい年配者と、地域への理解を深めたい若者を想定し、一般募集を行なった。WS参加者は中村町内の住民7名、周辺地区の住民3名、市職員3名、高知県建築士会の協力者3名、高専生4名の計20名であった。当日の様子を図5-3に示す。

表5-1. ワークショッププログラム

14:00～	挨拶・趣旨説明
14:10～14:20	これまでの調査でわかったこと
14:20～15:00	・各テーブルで自己紹介 ・質問シート選びながら、まちの歴史について共有する
15:00～15:20	・残していきたい地域資源は何かをチームごとに意見交換 →発表用ペーパーにまとめる
15:30～16:00	チームごとに発表
16:00～16:10	まとめ

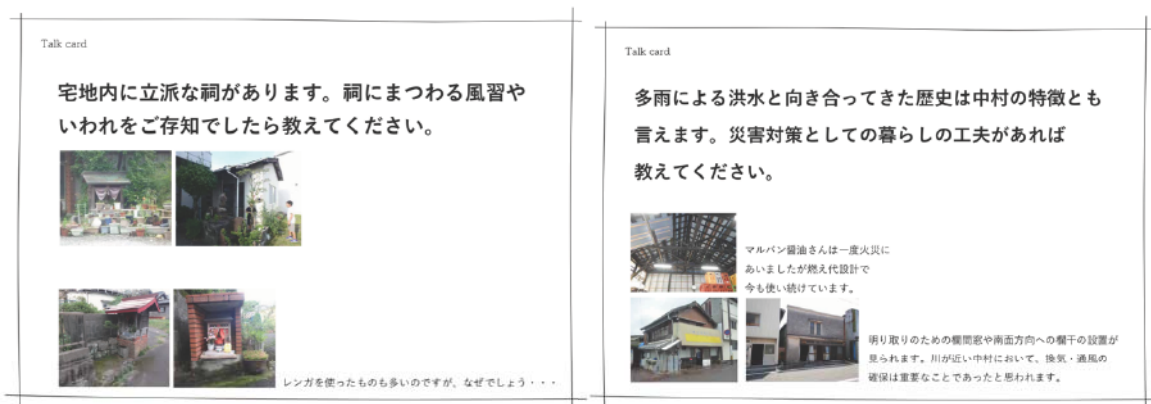


図5-1. 質問カード



◀中村中学校踊り子隊 川島カバン店、タカハシ家具店を通り過ぎ、一条通2丁目の角地にあるおがずや大八に差し掛かる頃には小さな踊り手も仲間入り。商店街もなかむら市民祭を彩った。(四万十市中村一条通・昭和50年頃・提供=四万十市立図書館)



▶なかむら市民祭 中村市が四万十市となる前、小京都といわれる中村に夏を呼ぶ催しとして開催されていた。市民の手づくり、市民が参加できる祭りで、提灯台やなかむら踊りのパレードのほか多くの出し物で活気にあふれた。踊りの列が賑いの浴衣で天神橋商店街を行く。(四万十市中村天神橋・昭和36年・提供=寺田悦子氏)

図5-2 古写真(文献5を元に作成)



図5-3 ワークショップ風景

各班の発表内容を次に示す。また、付録として巻末には各班で話し合われた内容を起こした文章を添付する。

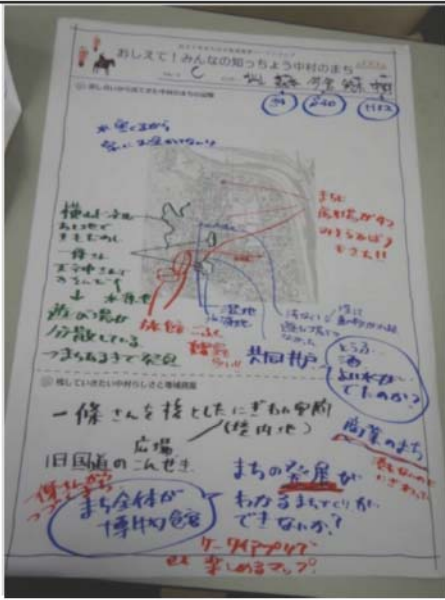
A班の発表内容

発表シート	発表内容の概要
	<ul style="list-style-type: none"> ●全国的に小京都と言われているが、地元の人々にとって小京都のイメージがない →建物、景観として残っていないから ●一條さんだけでは魅力として弱い ●藤の花をまちづくりに活かしたい →藤の花のフラワーロードを整備したらどうか ex.自宅の庭に植えてもらうとか ●統一性を持った景観整備が必要 →建物の高さや、建てる家屋の素材などの規制 <p>中村の魅力は山や川などの自然 大正に建てられた笹岡旅館は残すべき</p>

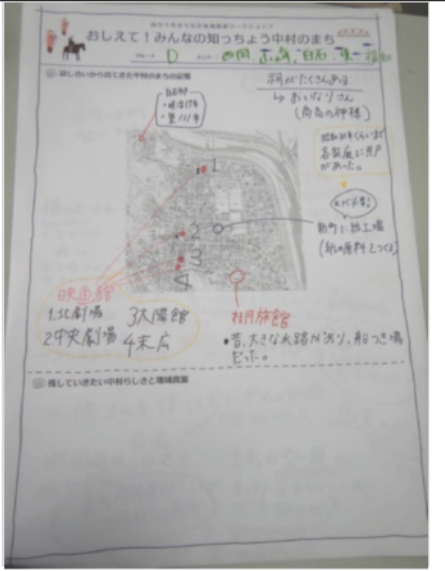
B班の発表内容

発表シート	発表内容の概要
	<ul style="list-style-type: none"> ●昔の歯医者さんは全て二階にあった →昔から洪水が多かったため、高価な機械が濡れないように二階に構えられていた ●土地区画整備事業の際に、背割水路が街区割りになった ●町の地割と水仕舞がリンクしている →中村の人々の生活に水が欠かせない →染物屋、酒造、豆腐など水を使う産業の発達 ●土地に高低差がある →洪水が多い状況の中で、水をどう流すか考えられた上での工夫では？ <p>水との関わりが今も深いことを、 まちづくりに活かせないか</p>

C班の発表内容

発表シート	発表内容の概要
	<ul style="list-style-type: none"> ●酒造り、豆腐作りに、共同の井戸を使っていた →水がよいから水に関わる産業が発達したのでは ●家にあまりお金をかけない →水害が来るから、あまり上等な家は建てないのでは ●子どもの遊び場がない →昔は大通りに広場があり、そこが遊び場だった ●一條神社を中心に町づくりすべき →駐車場の整備、銀行跡地を活用したらどうか ●町全体を博物館にする →アプリで楽しめるマップ <p>ex.カメラでかざすと、その場所の昔の建物が写る →町の歴史を辿れるようにしたい</p> <p>まちの発展が分かる町づくりを行いたい</p>

D班の発表内容

発表シート	発表内容の概要
	<ul style="list-style-type: none"> ●町の中心部に船着き場があった →大きな水路が町の中まで続いていた →水路は現存している ●北劇場・中央劇場・太陽館・末広劇場の4つの劇場があった →昔は娯楽面でも中村は賑わっていた ●昭和30年代までは、各家庭に井戸があった →井戸を使う習慣が生活の中に息づいている ●祠がたくさんある →お稲荷さんの祠は商売繁盛の神 →昔は商業が盛んだった <p>水を活かした町づくりを目指したい</p>

WSでは、現在の町並みが形成された昭和初期・中期の生活の様子が語られ、現在では見られない劇場などの賑わいの様子や共同井戸の利用、水と関わりのある酒造り、豆腐作りなどの産業が現在よりも色濃かった様子が明らかとなった。こうした住民の記憶は、まだ文献等にまとめられておらず、継承していくべきまちの歴史であると考えられる。

現在の景観については、小京都と言われているものの町並みとしては小京都のイメージは認識されておらず、一方で、一條神社といった一條氏にまつわる祭礼や場については重要視しており、一條氏の歴史を大切にしたいまちづくりの必要性が語られた。また、土地の高低差によってまちの水を川に流していることや地割と水路の関係など、水や水害に対する工夫が特徴であるといった意見も複数の班から聞くことができた。

今後のまちづくりについては、一條神社を中心にまちづくりをするべきという声や、四万十市のシンボルである藤の花のフラワーロードの整備、景観整備に藤の花を盛り込む、統一性を持った景観にするために建物の高さや材料を規制する景観整備を求める意見等が聞かれた。また、水を生かしたまちづくり、町の歴史と発展が見えるまちづくりを求める意見もあった。

WSを通して、町並みや建築物としては小京都の面影を感じられるものはあまりないと感じていることが分かった。一方で、「自然」が中村の魅力であることが共通の意見として見られた。また、今後のまちづくりに関して、現在ある資源を生かしてまちづくりを求める意見が各班から聞かれ、自然に重きをおきながら既存の資源を活用していくまちづくりが求められていることが明らかとなった。今後も、住民によるまちのイメージや、景観形成の方向性について議論する場を作り、景観の目標像を具体化していくことが望まれる。

(2) 文学散歩—秋水と暁のふるさとを歩く—

高知工業高等専門学校の主催（共催：四万十市教育委員会、協力：黒潮町教育委員会、大方あかつき館）により、「文学散歩—秋水と暁のふるさとを歩く—」と題したまち歩きを行なった。参加者は20名であった。上林暁（1902～1980）は、幡多郡田ノ口村（現・黒潮町大方）に生まれ、高知県立第三中学校（現・中村高校）に入学。この頃から文学に目覚め、友人と雑誌を出版する。30代中頃に手術のため幡多病院に入院。四万十川・蛸瀬川沿いの風景を作品の中に多く描く。町歩きをしながら、上林暁が描いた中村の町・大方の町を歩いた。まちなかエリアの散策ルートを図5-4に示す。



図5-4 散策ルート

暁は、文章の中に中村の風景を数多く描いており、為松公園（図5-5）、中村高校（図5-6）に文学碑がある。為松公園の文学碑には、「四万十川の 青き流れを 忘れめや」、中村高校にある文学碑には、「文芸は 私の一の芸 二の芸 三の芸である」とそれぞれ刻まれている。また、中村らしさに通じる表現として、次のような記述がある。

—作品抜粋—

「鉄橋の町」

僕はいま中村町の幡多病院の一室で寝起きしている。中村は鉄橋の町だ。静かな小さな町を通り抜けて四万十川の岸に出ると、途方もなく大きな鉄橋が、眼いっぱい西空を割っているし、どんなにか大きな工場街でもあるのだろうと思いながら、西の方から大きな鉄橋を長々と渡って来ると、案外小さな静穏な町が静かに息づいている。中村は大きな鉄橋をもった童話の町だ。

「四万十川幻想 3 渡船転覆」

この橋は長大である。石見寺山という山が中村の東にそびえているが、この山がこの近辺では一番高い山である。千二百尺あるという。渡川橋は石見寺山と同じくらいの長さである。石見寺山を横に倒せば、渡川橋の長さになるのである。

私は「童話の町」という文章を書いたことがある。中村に向かって西の方から入って来ると、大きな橋がある。どんな大きな町があるだろうと思っていると、案外不似合いな小さな町を発見する。それがまるで「童話の町」という感じである。



図5-5 為松公園の文学碑と文学散歩の様子



図5-6 中村高校の文学碑と文学散歩の様子

また、文学散歩への参加者を対象に、まちなかエリアに対する印象についてアンケートを実施した。アンケート結果を下記に示す。

0. 参加者の居住地

四万十市：4人 黒潮町：2人 宿毛市：1人 土佐清水市：1人 高知市・南国市・香美市：11人 佐川町：1人

1. 四万十市といえばどのようなイメージをお持ちでしたか？

清流・幡多の中心地・中世から続く商業都市。舟運とそれを支える川や山と結びついて暮らしのある町・小京都・広々とした清流・この頃は菜の花がたくさん…と。・四万十の居酒屋は上品、うまい。四万十川の流れる市・一條公の街 四万十川 沈下橋・四万十川と歩む町・おだやかであたたかいやさしい地・海、川的美しさ文化(古い)のある町・故郷・中村市と言いたい 小京都・四万十川・小京都、四万十川の清流

2. 中村が「土佐の小京都」と呼ばれていることをご存知でしたか？

知っていた:19人 知らなかった:0人 無回答:1人

3. 本日のまち歩きの中で「小京都」を感じたことがあれば教えてください。

一条神社・町割り 古い建物 おいしいごはん・まちの中に川が引き込まれていて、そして神社も近くにあり歩きたいまち・京都(在住5年)とは別物・碁盤の目のような街並・街がごぼんの目のようにになっている所・あまり感じなかった・町の角の形。たてまち、よこまち・一条さん・中村の町中のあちこち…と。・高い建物がなく、静かで京のムードがありました・まちの通りが整っていたこと・区割り 神社 古い旅館等・路地、水路を流れる水音・ごぼんの目の通り・町区画の整然さ・展望台からみた町割り・街並(碁盤の目のようにタテヨコに通ずる道)京都に見立てた地名・街区の形成町に残る工芸品、歴史資料、一条さん大切にしながら発展してきた姿(地名・商品・祭事・神社・仏閣など)

4. まち歩きの中で、中村らしいと感じたモノやコトはなんですか？

良い意味で地味な印象を受けた・町のあり方 地割 商店街・昼食時の旅館のふるまいと言葉・全体に静かな感じがしました・水路 一条神社 一条家に関する石碑等・赤鉄橋・為松公園、初めてだったので新鮮で眺望が抜群でした・一條様ですか…・教育委員会のガイドの方に中村魂を感じた。質の高いガイドだった。・四万十川の菜の花、為末城からの眺め カキセ川の風景・今に残る古い町並みや家屋など・一条神社・道路・一条神社 博物館

5. 上林暁は、中村のことを「童話の町」と例えています。あなたならどのように例えますか？

食の町・河の町・消えかかる町・川の恵みと川の災いと共に生きる町・今昔入りみだれた町・川と花と星の町 鉄橋の町・ごぼんの目の町・京風俳諧の町・文化の町かな・やはり鉄橋の町・四万十川にかかって居る鉄橋が、赤さびた橋のイメージです・高知県ですが高知中部と違って”都”のイメージ(人が優しい)

6 まとめ

(1) 四万十市まちなかエリアの景観的特徴

本調査から得られた四万十市まちなかエリアの景観的特徴として、次のようにまとめることができる。

- ・ 中世からの土地利用が継続しており、建築の形に現れている。
- ・ 二階建て以下の切妻棧瓦葺の建築物をベースとした小規模な建築物の集積によって商業都市が形成されている。
- ・ 四万十川流域での流通往来の姿を、板材やレンガ、バラスブロックなどの建築物の外観意匠に見ることができる。
- ・ 居住地ごとのまとまりとコミュニティの関係性を、両側町を構成する町割りに見ることができる。
- ・ 一條氏と中村との関わりは、東山などの地名や、一條神社、不破八幡宮などの社寺といった場所の意味づけ、一條大祭などの祭礼によって伝承されてきたと言える。

(2) 景観整備に向けた方向性

本調査から見出される景観整備に向けた方向性として次の点が挙げられる。

- ・ 地割形状や用途、建築の形態を誘導することで中世以降の土地の使い方や町並み景観を継承していく→例えば、景観計画の策定や、戦略的な空き家・空き店舗活用によって誘導・規制することが考えられる。
- ・ 四万十川の流通往来の特性を表す素材を積極的に活用することで、中村らしい景観を継承・創出する。→例えば、デザインコードや補助制度による誘導など
- ・ 町の発展の経過が理解できる整備を行う→都市は各時の重層により、地域性を形成してきたことから、発展の経過を地域住民が理解してまちづくりに参画できるよう、継続的な調査やまちのイメージ像の共有の場を設けていくことが望まれる。

(3) 今後の展望

本報告では、本調査結果に基づき四万十市まちなかエリアの景観的特徴を提示した。しかし、まちづくりを進める上では、地域住民自身が景観的特徴を見出し、共有しなければ景観整備に結びつけることはできない。そのため、本調査結果等を活用して地域住民とともに景観について考え共有する機会を継続的に設けていくことが肝要である。そのためのツールの一つとして、まち歩きマップを作成した（付録参照）。また、本調査は「四万十市まちなか再生検討会」の一環として単年度で実施したことから、地籍図の分析、民家調査等は事例抽出にとどまった。今後、こうした調査を継続的に実施していくことで、中村らしさや、中村らしさを表現する言葉に固有性が生まれてくると考える。

参考文献

- 1) 西川幸治：歴史の町なみ 中国・四国・九州・沖縄編、日本放送出版協会、1987
- 2) 高添朝治・坂本重道ら：中村町史中村町役場、1950
- 3) 阿部貴弘・篠原修：近世城下町大阪の上地地区における城下町設計の理論、土木学会論文集、No.D2、Vol68、p1～p10、2012
- 4) 中村町教育委員会：中村城跡
- 5) 山田恭幹：幡多の昭和、樹林舎、2017

付録

・まちあるきマップ
「四万十市中村まちなか散歩」

・四万十市まちなか地域資源発見ワークショップ
チラシ・テープ起こし